

第6章 ぐい呑みコレクションの整理

1. ぐい呑みリスト

ぐい呑みを購入すると、「ぐい呑みリスト」に、購入の順番に整理番号をつけ、購入年月日、何焼きか、購入場所、価格、大きさ（口径と高さ）を書いたリストに整理しておく。こうしておく、いつ、どこで購入したかがすぐに判り、またアルバムなどに整理した場合も、整理番号で検索できるので便利である。

小生のぐい呑みリストは次のとおりである。（抜粋、なお購入金額は、ここではブランクにしている）

No.	購入月日	種類	特筆	作家名	購入場所	価格	口径	高さ
175.	H080615	備前焼		藤原 啓	大阪 阪急梅田	000	6.2	4.2
178.	H080721	備前焼	金杯	藤原 啓	大阪 阪急梅田	000	7.2	5.5
191.	H080212	美濃焼	割高台	林正太郎	多治見 井筒	000	7.4	6.5
210.	H080915	信楽焼	井戸	杉本貞光	奈良 陶屋敷	000	8.0	4.3
216.	H090115	清水焼	梅華皮	清水卯一	大阪 阪神梅田	000	5.9	4.8

2. ぐい呑みアルバム

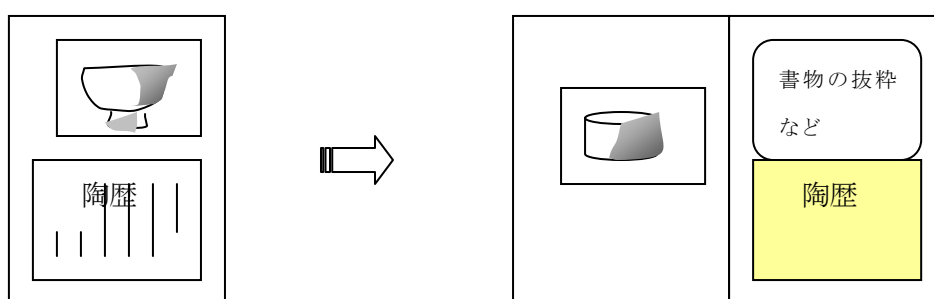
やきものの関係の本を見ていると、実に見事に対象物を写し出した写真に出会う。単にそこにあるのは器体の忠実な写しでなく、陶芸作家の思いまで映し出しているように感じさせる。角度、照明、背景の色合いなど計算され尽くしてそれでいて自然。

ぐい呑みのコレクションもそこそこの数になってくると、ぐい呑みに惹かれる気持ちをうまく表現し、他の人にその魅力を思いっきり伝えたいと考えるようになってくる。文章で、あるいは、絵で、しかし限界がある。プレゼンテーションの世界ではないが、こちらの思いをいかに正確に、相手の心に響き、共感を持ってもらえるにはなどと考えてしまう。やはり写真で「見える」ようにするのが一番近道である。

小生も最初は、コレクションのぐい呑みを一つ一つ写真に撮り、陶歴などと一緒に整理することによりぐい呑みの魅力を伝えることが出来ると考えた。ぐい呑みの正面

からの写真を撮り、陶歴とともにクリアファイルに整理していったのである。A4サイズの上半分に写真を貼り、下半分に陶歴などを台紙に切り込みをいれ整理したのである。

しかし、しだいに、単に写真と陶歴だけでは、コレクションのカタログみたいに思えるようになってきた。物足りない。ぐい呑みの魅力を充分引き出せないし、思いも伝わらない。そう思い出すと、これまでそれなりに満足していたものが急に崩れ落ち全く味気ない存在に思えるようになった。何か一味つけたい。あれこれ考え、やきものに関する書物のなかで、当該作家のことが書かれてあるとそれを抜き出し、ぐい呑みとの出会いの瞬間の思いなどを書き添えることで少し味付けをした。



しばらくは、これで満足していた。しかし心のなかでは何かひっかかるものがあった。ファイルは、瀬戸・美濃焼、備前焼、笠間・益子焼などと窯業地別に作っていた。

やきものの専門誌などをみていると、抹茶茶碗などの作品の写真が掲載されている。そのものが手元にあると錯覚するくらい持てる魅力を写し出している。被写体のバックを黒く落とし、軟らかいライトでほんのりとライトアップ。幻想的ななかにそのもの持つ魅力が溢れている。もはや写真ではない、と思えるほどである。

こんな写真を撮りたい。

例えば、「新現代陶芸ぐい呑み図鑑」（光芸出版）などは図鑑的に撮られているがやはりどこか違う。小生の写真は迫力がなく、単に記録的に撮影したものでしかすぎない。写真の撮影の仕方もまずい。また、コンセプトがないので、うったえる魅力が薄れるのではないか。

写真については、セットを組み、照明を2箇所から当て、三脚を組み、接写レンズを使用、絞りの値を振らしたりしてトライを続けた。ぐい呑みも正面だけでなく、見込み、高台部を写すことによって、その魅力を引き出すことが出来る。そして共箱とのセット撮りを行うことによりその持つ魅力を存分に引き出すことが出来ると思った。

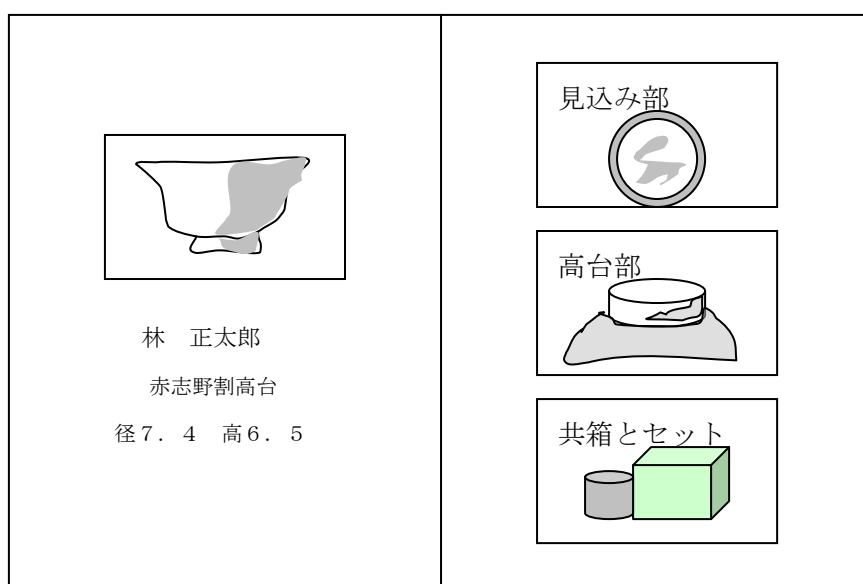
ぐい呑みの見どころを外さないことがポイントである。

撮影は部屋の中で行った。被写体に左右から照明を当て、フラッシュには布を掛け軟らかい光があたるように工夫した。また、シャッターを切るときはぐい呑みに「は

い、笑って。」と心の中で声を掛けることにした。

そこそこの感触を得るや、これまでのアルバムの全てをやり直すことにした。

これを機に、これまでのぐい呑みの写真を中心に陶歴、陶芸作家メモ、随想などをまとめ、窯業地別に整理していたのを止め、整理ナンバー順（購入の順番）に「ぐい呑みアルバム」と「マイぐい呑みコレクション」の2つのシリーズに分けることにした。「ぐい呑みアルバム」は、ぐい呑み1つにつき4枚の写真を撮り、整理することにした。正面、見込み、高台、そして共箱とのセットの4枚である。



3. マイぐい呑みコレクション

ぐい呑みとの出会いの記録は「マイぐい呑みコレクション」としてまとめることにしている。求めて彷徨った思い、陶芸作家との出会い、一つ一つのぐい呑みにまつわる様々な記録をまとめておくのである。

例えば、次のような書き方である。

175. 備前焼

径 6.2 高 4.2

・藤原 啓 明治32年生

昭和13年築窯。日本工芸会正会員、鑑査、審査員。一水会委員。重要無形文化財保持者。

・買い物ついでに阪急の美術工芸品コーナーを覗く。眼に飛び込んできたのは、

なんと人間国宝藤原 啓のぐい呑み。昭和45年以前の古備前を研究していた頃の作品。小ぶり。しかし何ともいえない落ち着き。格の差。石はぜ。かせ胡麻。

- ・箱書「備前 酒杯 啓」
- ・平成8年6月15日購入 大阪 阪急梅田

記録は残る、記憶は消える。ちょっとしたメモを書きとめておけば、いろいろと思い出すことが出来る。じつに楽しく、ぐい呑みと対話ができるのである。